様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５６４

研究課題名（和文）James Joyce作品における談話的主題化の問題

研究課題名（英文）Discourse thematization in James Joyce's novels

研究代表者
菊池　繁夫（Kikuchi, Shigeo）

関西外国語大学・英語キャリア学部・教授

研究者番号：７０２０４８３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではJames JoyceのUlyssesで、どのように二人の主人公であるDedalusとBloomが二人別々の登場をし（談話的主題）、その二人が徐々に近づいていくという、いわば死に行くダブリンの枕頭に立てられた「歩く二本のキャンドル」（談話的題術）ということを中心に研究をした。このUlyssesに現れた二人の主人公が離ればなれに語られ始め（主題）、徐々に近づくという媒介を経て最終的に二人が並び立つ（題術）という形は彼の作品群の底流に流れる「主題－題術構造」であって、他のあらゆる作品がこの形を取り、テクスト内で語られる発話は二次的意味として、この構造に則したものとなる。

研究成果の概要（英文）：Following the theory of textual thematization at the level of fictional narrative discourse, this research centered around how Stephen Dedalus and Leopold Bloom in James Joyce’s Ulysses are walking representations of "two candles" set at the head of a dying Dublin. This is one instance of a grand design which is repeated in many of his novels. All the speech acts done in his novels carries the secondary meaning following this theme-rheme structure.

研究分野：文体論

キーワード：discourse theme　discourse rheme　textual thematization

１．研究開始当初の背景

プラーグ学派によって研究の端緒がつけられ、後に英国の機能文法学者の M.A.K. Halliday によって進められた clause（節）の情報構造が clause の集合体である text（テクスト）においてもみとめられるのでないかというのが研究開始の動機である。

Oxford 大学の哲学者の J.L. Austin は、その speech act theory（発話行為理論）の中で、a declarative sentence は二つの部分に分けられるとした。performative part（遂行部分）と proposition（命題）の部分である (Austin 1962)。どのような natural narrative（自然ナラティブ）でも narrator（語り手）は speaker（話し手）であり、narratee（語りの受け手）は listener（聞き手）である。例えばアメリカの社会言語学者の William Labov の集めた narrative の構造は、この形を取る (Labov 2001)。彼から一つの例を取ると "The steering wheel hit this fellow in the heart"（ハンドルがそいつの胸に当たった）という narration（語り）は普通の会話と同じく二人の会話参加者の間で行われる。この形が自然であるため、literary text（文学テクスト）を読むものは、この natural narrative と同一の narration の構造を持っていると錯覚をしてしまう。そして、虚構 text で語られている内容を事実であると錯覚する、あるいは錯覚と分かりつつ、その話を楽しむ。Natural narrative では narrative の author（作者）と narrator（語り手）は同一である。しかし literary narrative では、この二つは理論的には別物である。Narrator と narratee の世界—そこに登場人物が置かれるのだが—の背後に author（作者）と reader（読者）が置かれる世界が存在する。Reader は虚構の存在である narrator によって語られた世界を自然の世界のものと錯覚をする。（ここに literary text を読む楽しみは存在するのだが）この語られた虚構世界が Austin のいう propositional part に相当する。そして、もしこの虚構世界が proposition（命題）を持つ clause（節）と同じ構造を持っているのとすれば、clause の分析方法は虚構 text の分析に生かすことができると考えた。その中でも特に theme （主題）と rheme（題述）に焦点を当てて見てはどうかと思い至った。

２．研究の目的

上記の発想のもと、現在まで中世英語の narrative の text から劇や詩に至るまで、虚構 text における情報構造の研究を行ってきた (Kikuchi, Shigeo (2001) "Lose heart, gain heaven: The false reciprocity of gain and loss in Chaucer's *Troilus and Criseyde*." *Neuphilologische Mitteilungen* CII(4). 427–434; Kikuchi, Shigeo (2001) "Unveiling the dramatic secret of "Ghost" in *Hamlet*." *Journal of Literary Semantics* 39(2). 103–117; Kikuchi, Shigeo (2012) "O I just want to leave this place: Auden's discourse of thematized self-alienation." *Philologia* 10. 61–72; Kikuchi, Shigeo (2013) "Poe's name excavated: The mediating function and the transformation of discourse theme into discourse rheme." *Language and Literature* 22(1). 3–8)。それを踏まえて、この研究では、James Joyce の作品、特に傑作であり難解と言われる *Ulysses*（『ユリシーズ』）において、どのように二人の主人公である Stephen Dedalus と Leopold Bloom が、その語りと描写を通して情報構造を形成しているか、そして、それを通して作者のどのような意図を知ることができるかを見ることを目的とした。虚構 text（主として文学作品）における text 全体の中に Halliday らの情報構造を発見し、発話者（ここではその作品の author（作者）、つまり情報の発信者）の意図に迫れることを仮説として立てる。それに基づいて James Joyce の作品、特に傑作と言われる *Ulysses* の情報構造に迫り、発信者としての author（作者）の意図に迫ることを目的とした。

３．研究の方法

J.L. Austin の speech act theory（発話行為理論）の中で performative part（遂行部分）に連なる proposition（命題）の部分の情報構造の枠組みを虚構 text に当てはめることとした。

まず、同一 author（同一作者、つまり同一発信者）による、複数の虚構 text を横断的に見ることにより、その text の情報構造の仮説を立てる。 James Joyce の *Ulysses* においては Dedalus と Bloom という二人の主人公が、いわば最初期の作品集 *Dubliners*（『ダブリン市民』）の 'The Sisters'で扱われた「二本のキャンドル」と相似の役割を果たしているのではないかという仮説を立てた。'The Sisters'では人が亡くなると二本のキャンドルが、その頭のところに置かれるとあるからである。'The Sisters'ではこの「二本のキャンドル」の主題は反復して現れ、物語の後半においては、亡くなった牧師の側にあたかもキャンドルのように、その牧師の姉妹が佇んでいる。この物語が Joyce の最初の作品 *Dubliners* の冒頭に、あたかもキャンドルのごとく置かれているのは Joyce の各作品の proposition の持つグランドデザインとみなすことができるのではないかという仮説を立てて分析を進めた。

４．研究成果

今回の研究では James Joyce の作品の *Ulysses*（『ユリシーズ』）の分析を中心としたが、そこでは二人の主要な登場人物が離れて登場し（discourse theme 談話的主題）、徐々に接近しながら最終的に並び立つ（discourse rheme 談話的題術）ことで、この *Ulysses* は、初期の作品 *Dubliners*（『ダブリン市民』）の 'The Sisters' に現れたものと同じ作者の意図、すなわち dying Dublin（死にゆくダブリン）への弔意を示し、ひいてはその新生を願ったという意図が発見できた。また中で使われている clause

‘the two candles must be placed at the head of the corpse’の情報構造が相似形の形で、この clause の使われている作品である ‘The Sisters’を支配し（この二本のキャンドルを語る clause がこの ‘The Sisters’の冒頭に置かれている）、そしてこの作品そのものが Joyce の最初期の短編集 *The Dubliners* の冒頭に置かれている。そして、この The Dubliners が後に続く Joyce の作品群の出発となる。こういった傾向の流れの中で、傑作と言われる *Ulysses* の中にも同一の情報構造を持つ proposition を発見できたわけである。全体を図示すると以下のごとくである：

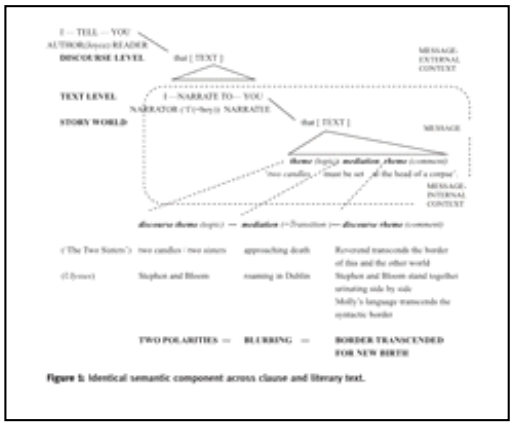

Figure 1: Identical semantic component across clause and literary text.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① Shigeo Kikuchi “The Two Walking Candles in James Joyce’s Ulysses（ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』における二つの歩くキャンドル）,” Journal of Literary Semantics (Mouton de Gruyter, Germany), 査読有, Vol.45, No.1, 2016, 77-89
URL:
http://www.degruyter.com/dg/viewarticle.fullcontentlink:pdfeventlink/$002fj$002fjlse.2016.45.issue-1$002fjls-2016-0006$002fjls-2016-0006.pdf/jls-2016-0006.pdf?t:ac=j$002fjlse.2016.45.issue-1$002fjls-2016-0006$002fjls-2016-0006.xml

② Shigeo Kikuchi “James Joyce's Free Indirect Thought and the two Candles in *Dubliners*（ジェイムズ・ジョイスの自由間接思考と『ダブリナーズ』における二つのキャンドル）,” 『近代英語協会創立 30 周年記念論文集』（編集委員会代表 中川憲）, 英宝社, 査読有, 1 巻, 2014, 373-384

〔学会発表〕（計　5　件）

① Shigeo Kikuchi, “James Joyce’s Creation of Free Flowing Thoughts across Characters’ and Reader’s Boundaries of Consciousness（ジェイムズ・ジョイスの登場人物と読者の意識を越えた自由思考）,” 2015.6.11, 6th International Conference on Consciousness, Theatre, Literature and the Arts, St Francis 大学, ニューヨーク（アメリカ合衆国）

② 菊池　繁夫 「作者の意図への気づきを指導する」日本英文学会第 87 回全国大会シンポジウム 「文体論に基づく英語教育再興」, 2015.5.24, 立正大学品川キャンパス（東京）

③ Shigeo Kikuchi, “The Walking Two Candles in James Joyce’s *Ulysses* （ジョイスの『ユリシーズ』における歩く二つのキャンドル）,” 2014.7.5, International Association for Literary Semantics (IALS), Kent 大学、キャンタベリー（英国）

④ Shigeo Kikuchi, “James Joyce’s Creation of Free Flowing Thoughts and His Deracinated Life across Cities（ジェイムズ・ジョイスの自由思考の創造と彼の都市横断的な根無し草的人生）, 2013.12.1, Travelling Narratives: Modernity and the Spatial Imaginary, Zurich 大学, チューリッヒ（スイス）

⑤ 菊池　繁夫「Reading James Joyce’s Ulysses Episode 2」（ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』Episode 2 を読む）2013.8.10, 広島英語研究会第 54 回夏季研究大会, 広島大学, 広島

〔図書〕（計　2　件）

① 菊池　繁夫 他, 九州大学出版会,『英語文学テクストの語学的研究法』（共編著）, 2016, 355 (3-80, 81-87, 139-205, 209-230)

② 菊池　繁夫 他, 関西外国語大学, *New Horizons in English Language Teaching: Language, Literature and Education* (Selected Papers from the Kansai Gaidai IRI Forum)（共編著）, 2013, 368 (131-148)

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
菊池　繁夫　（KIKUCHI, Shigeo）
関西外国語大学・英語キャリア学部・教授
研究者番号：70204831

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：